

あると痛感した。

## 震災時に給水活動にも従事

西宮市市民局長

清原 進

この度の震災は、我々が未だ経験したこともない大災害であった。その中で、消防団の活動は、自分の家族のこと、家のことを省みることなく、地域の消火活動に、壊れた家屋からの住民の救助活動等に大いに活動されたことを、よく耳にした。この活躍ぶりは、内閣総理大臣表彰、消防庁長官表彰の受賞を始め、全国各地に配布された消防団の啓発ポスターに本市の消防団の消火・救助活動の様子の写真が用いられていること、などが如実に物語っている。

昨年秋、消防局とタイアップして河川を堰止めての放水訓練を実施したことが、今回の震災での消火活動に直ちに生かされたということも聞いた。このことは、消防団の日常訓練の賜物であり、日常訓練が如何に重要であり、貴いかということ、を、改めて認識されたのではないかと思う。

震災後のある日、私は、消防団の消防自動車が黄色の大きなポリタンクを載せて走っているのを見かけた。その時は、水道の配水管が壊れているので、万一の火災の発生した場合に備えた消火活動用のものとばかり思い込んでいた。しかし、後日、そのポリタンクは、地域の方々に対する給水活動用のものであることを知った。地域の方々には、この給水活動は、大変喜ばれたのではないか。このように、この度の震災では消防団には、本来の職務以外にも市民の方々のために、活躍していただいた。有難いことであった。

消防団長を始め団員の皆さんには、自営業に従事したり、サラリーマンとして勤務するなど日常生活を営みながら、防火思想の普及、万一の火災・災害発生時には、我が身の危険性をも省みることなく、率先して、市民の方々の生命と財産を守るために、日夜活動していただいていることに対して、改めてお礼申し上げるとともに、今後とも、市民の方々が安心して日常生活が送れますよ

う、活躍されんことをお願い申しあげる次第です。

## 阪神大震災の体験

副 団 長

松本 光 央

平成7年1月17日午前5時46分、観測史上初の震度7の激震が文教都市西宮を巨大な力で襲った。自然の恐ろしさグラグラと横揺れドカンと一発、一瞬の衝撃を受けた。瞬間、体は家具、テレビ等の下敷きになっていた。幸いにも頭から蒲団をかぶったので命は助かった。重くて蒲団から体が出ない。いつも置いている枕元の懐中電灯も飛んだのか物の下敷きになってしまったのか判らない。やっと力をふりしぼり這い出して事務所の懐中電灯を見つける。家の中の有様に蒼白となる。ここが今、自分が生活していた家かと目を疑う。足の踏み場もないガラスの破片で一杯の中を土足で歩く。頭が痛い、家具の下敷きになった時頭を打ったらしく、瘤が2つ3つ出来ているが、すぐ外に出て近所の見回りに行く。倒壊家屋を見て啞然とする。町内が一変している。一軒、一軒声を掛けて安否を確認する中で、怪我人を見つける。一人住まいの中年女性が骨折して動けない、すぐ息子と車に乗せて松本整形外科に運ぶ。医者は来ていないが、病院の事務局に頼んですぐ引き返す。次は、倒壊家屋の階下で老人が生き埋めになっている。助けを求める声が聞こえる。近所の人と力を合わせて救出にかかるが工具がなく、各自ノコギリやバールを探し出してくる。今津分団も現場にかけつけて救助にかかってくれる。ノコギリ、バールでは仲々進まない。イライラしてくる。生き埋めになっている老人に「頑張れ、頑張れ」と声をかけて励ます。約3時間が過ぎ、やっと救出すぐ畳の上に乗せ消防車で協立病院に運ぶ事が出来た。病院の中は頭、手足から血を流して苦しんでいる人、骨折で動けない人で一杯だ。怪我人を病院に頼み、すぐ引返し再び倒壊現場へと向かう。津門で生き埋めの人の救助を求められる。倒壊現場に行き、いくら大声を掛けても中か

らは何の返答もない。救出する道具がなく、どうする事も出来ず消防局に連絡を取り救助を頼み今津分団に引き返す。分団員は3班に分かれ、地区の倒壊現場の救助に出動している。17日、今津地区で生き埋めになった被害者9名を救出したが、重傷のため2名の方は死亡された。火災は上甲子園地区、高木地区で発生したが、各分団長の素早い活躍で大きな火災にならず最小限度でくい止め鎮火出来たのはすばらしい事です。各分団員の皆様には自宅の倒壊、親族に死傷者があるにも関わらず住民の救助活動火災消火活動、又、1月20日から1ヶ月間の給水活動には各分団員交替で朝9時より夜8時過ぎまで、各地区に給水して回り市民の方々に喜んでいただいた。17、18、19日は食料も少なく飲まず食わずで活動してくれた各団員の方々には頭が下がる思いです。この大震災の救助活動に当り今さらながら救出器具の整備の不足、緊急時の通信器具不備等を強く感じさせられた。被災者の人々も何をどうしていいのか、電話は不通、公的な情報も何もない不安の中で近所の人達との励まし助け合いで、どれだけ救われ人の心の優しさを改めて発見する事が出来たと思う。この震災災害に北部の生瀬、名塩、山口地区の各分団員の方々には道路状況の悪い中救助活動に馳せ参じていただき、又給水活動には1月20日から1ヶ月間、早朝より夜遅くまでご活躍いただき深く感謝いたしております。今度の災害に直面して我々消防団員が一致団結してこの震災を乗り切ったことを誇りに思っています。

## 平成7年1月17日を振り返って

上甲子園分団

分団長 茂木 清

それは突然何の前触れもなく、1月17日午前5時46分、私たちを地面の底から一撃の「ドン」という音と共に襲ってきた阪神・淡路大震災でありました。これは、誰も経験したことのない未曾有の大災害でした。上甲子園分団の活動範囲においても、前日と全く違った光景が、朝の開ける光の下でまざまざと見せつけられる結果となつてし

まった。地区内では、全壊60軒、半壊120軒、一部損壊280軒の被害を受けたにも関わらず、あの朝は、自分たち周辺の災害の大きさに驚くと共に、次に来るかも知れない余震に怯えながら、倒壊家屋の下敷きになっている人達の救出に、団員各人が各々の住居周辺で活動していたことはいうまでもありません。団員の話によると、

「救出したにも関わらず、死亡された人、その家族と共に涙し、次の救出に我が身を奮い立たせた。」

とか

「梁の下敷きになって重傷を負っている人に頑張るよう声を張り上げても、砂塵の中で命の灯が遠くなっていく姿を見て、一人の人間の力のなさを思い知らされた。」

等々言葉に言い表せない現実を各団員が経験することになった。しかし、この騒動の中でけが人や遺体の搬送先は、病院と分かっているものの、多くの怪我人にどう対処すべきか分からず、各団員が110番、団本部、消防局、消防署に電話するも、全て話し中とか呼び出し音のみで会話ができなかったと聞く。止むなくその家人や近隣の人が病院に送っていたようである。

災害発生後1時間前後だと記憶しているが、小林班長と数人の団員が、消防自動車で私の家へ来て、

「広田地区で大きな火災が発生しているらしく、出動要請があった。」

と私に出動の了解を求めに来た。分団長の私は、5名程度で出動することを了解し、赤色灯を回転させサイレンを鳴らして出動しようとしたとき、近所の人達が、

「あの家屋の下に母親が埋まっているので助けてください。」

とか

「怪我人がいるので運んでほしい」

とか声をかけられるが、この地域より広田地域の方が大変らしいので、とにかく1度出動させてくださいとお願いしながら、近隣地域の惨状が気になるものの出動することにした。国道2号線瓦木交差点を北上し、広田地区へ向かおうとしたが、JR陸橋の登り口で車は完全に渋滞に巻き込ま

れ、前にも後ろにも進めることが困難になってきた。広田地区へいつ着けるか分からない状況の中で、広田の人達には申し訳ないが、自分たちの地域の人命救助にあたるのが大切と判断し、広田地区を断念し、次の防災指令に備え車を車庫に戻し、各人の住居地区で救出活動をすることにした。

地震発生後1時間30分頃だと記憶しているが、  
「火事だー！」

との叫び声で振り返り見上げると、私の家の1軒おいた西側の倒壊した文化住宅の南側から真っ黒な煙と赤い炎が我が物顔で立ち上がっていた。周囲にいた団員に私が指示し、車庫へ駆けつける者、又、火事現場の整理にあたる者と自然に分散し、分団の消防自動車来るのを待ったが、その間苛立ちを覚えるほど長い時間が経過したように思える。そして、安江部長が消火栓の筒先とホースを持って駆けつけてきた。すぐさま消火栓に接続し、バルブを全開にしたが、圧力がなく全く役に立たなかった。今思えば、当たり前のことではあったが、その時は全く気が付かぬまま接続していた。そこに、サイレンとともに小曽根分団が応援に来てくれた。どれだけ有り難く思ったか知りません。水利を上甲子園ビューハイツマンションの防火水槽から取り、消火にあたったが、火の勢いは強く、文化住宅の南側から北側へと燃え広がっていった。そこへ放水が開始された。数分後、我が上甲子園分団の車が到着したので、各団員は奮い立ち各々の持ち場へ展開した。水利を防火水槽としたが、火勢が北へ北へと燃え広がって行った。このため、北側道路下の河川より取水を決定。水量が少なく、吸管が浮き上がり給水できないため、止むなく倒壊家屋の木材等にビニールシートをかけることにより、水位を上げ消火活動ができるようになった。この間、何分経ったか分からないが、火事の勢いと合わせるように日頃の訓練の成果が現れ、私の指示に従い団員はテキパキとした行動で放水できたが、2分団の放水では収まりがつかないほど火勢が大きくなっていった。この頃になると、周辺全域で消防、救急車、警察、企業車等のサイレンの音がけたたましく鳴り響き、全ての車両がこの火事場に来てくれるのかと想像し

てしまうほどでした。消防局、署、津門、今津、甲子園口分団と応援車両が増え、いつの間にか猪名川町の消防車が到着して応援していただいたのには本当に驚いた。

皆様のお陰で、午前8時30分頃から午後10時頃までかかりましたが鎮火でき、倒壊した文化住宅1棟だけで済んだことを本当によかったと言葉では言い表せないほど感謝しています。日頃、消防団活動を行っている私たちは、なかなか活動の中身について理解してもらえなかったのですが、今回の震災で私たちの活動を目の前で見ていただいた近隣の人達に熱いアピールが出来たことは、今後の消防団活動の温かい理解が得られるのではないかと考える。鎮火を確認し、応援車両が帰った後、再失火を警戒するため、車両と数人を残し、他の団員は各々の家の整理と片づけに帰宅させることとし、朝の明けたときからの活動で、家の状況すらはっきりと分からず、無我夢中の一日でした。家族をおいての活動で、ご家族のご心配はいかほどのものであるかを考えると、この地震への憎しみが増長しているほどである。

余震・火災等の災害が予想されるため、夜警を行うこととした。夜警をしている際には、消防団本部からのおにぎりの差し入れでお腹も心もホッとすることを覚えている。その夜の活動としては、鎮火したはずの上甲子園の火災現場で、倒壊した1階の布団等夜具が再出火し、その消火活動の出動と阪急北口駅東側の高架下の南北道路が水没し、その排水処理を本部から依頼され、高木分団及び芦原分団とともに排水した2件でした。

余震が続く中、平成7年1月17日の長い一日が終わり、振り返って見れば団員とその家族にも大きな怪我人も出ずに無事に一日を終えたとき、改めてこの日の恐ろしかったことを思った。掛け替えのないこの日、消防団の制服、ヘルメットに集まってくれた近隣の何人かの学生や若い人や、又ご老人に至るまで自然体で手を貸してくれ、応援をしてくれた方々に感謝し、名前も分からず手助けをしてくれた人達を忘れることは出来ません。本当に終生忘れることなく、今後の消防団活動に日常の社会活動に素直に生かしていきたいと思えます。

身体中疲労の固まりであっても、改めて消防団に入団して、今災害時の救援活動に参画できたことに喜びと感謝の気持ちを感じずにはられません。

## 遠い夢

中野分団

分団長 北 浦 治

私は戦争の体験はありませんが、戦争を体験された方に聞きますと、あの光景は戦争の時よりも数倍も大きいと言われた方がおられました。私の生まれ育った山口町中野地区は、裏六甲の有馬温泉より北へ約1キロのところであり、有馬川が流れ、緑の多い田舎です。あの日17日は、生涯忘れることの出来ない日であります。私は、毎朝5時半過ぎに起きるのですが、当日は何故か5時過ぎに目が覚め、トイレに立ち、その後約10分程ボーッとしていたのですが、その後あの大きな揺れを感じ、すぐに地震とわかりました。

初めはゴーッと地鳴りのような音がしたように思えますが、はっきりと覚えていません。すぐに家の下から何かが揺すっているように見え、ガタガタと大きな音がして、すぐに電気が消え、地震とわかりましたが、誰かが家の外でいたずらをしているようにも思えました。でも、本当に危ないと思い、大きな声で

「地震や！」

と叫び、妻の上にかぶさり、少しの間じっとしていましたが、真っ暗闇の中を懐中電灯をつけ、すぐに作業服、ヘルメット姿で外に飛び出しました。私の家は、公会堂の側ですので、そこへ行くと既に約20名の方が集まっていました。その中に団員もいましたので、川向かいの老夫婦のことが気になり、二、三人で駆けつけたところ、主人がタンスの下敷きになっていると言われたので、他の人に頼み、私は器具庫に走り救急車の代わりにと思い、消防自動車でそこへ戻りましたが、何とか無事と言われましたので、器具庫に戻りました。その後、3人4人と団員が自発的に集まりましたので、すぐに徒歩にて区内を回り、ハンド

マイクで「大丈夫ですか？ガスの元栓を閉めて」と回りました。一瞬の出来事で、正直言ってなにがどうなったか分かりませんでした。家を飛び出したのは、6時10分頃と思います。団員の一人一人が自発的に集まってくれたのが本当に嬉しく思え、徒歩巡回の後、すぐに車両にて西山地区や付近のパトロールに出ました。この時ほど、団員一人一人の力強さや団結心というものを感じたことはありませんでした。分団長として何かジーンとくるものを覚えました。

それからが大変でした。団員の一人の携帯ラジオからはいる神戸市内の大火の情報や、西宮、芦屋の情報の入る中、本部の指示により消防局への集合の命を受け、私と5名の団員で西宮へ走り、分団器具庫には副分団長を指揮者として待機又は時間的に徒歩調査等に残ってもらいました。私は、市内に入るにつれ、頭の中が何がどうなっているのか真っ白になりました。ラジオの情報よりも遥かに事の大きさに絶する思いがしました。団員の誰も初めて発した言葉が、

「何やこれ」

の一言でした。しかし、それが現実であり、物語ではありませんでした。消防局に入り本部の指示により、現場へ行き救出活動を開始しましたが、言葉等で表現の出来るものではありませんでした。当日より3日間は救出活動、その後は給水にと走り回りました。電気はもとより、我々人間一人が生きてゆくには、電気、水そして隣近所の方々の温かい心一つ一つが生きてゆく心の支えになっている事が、初めて分かったような気になりました。

給水活動で一番心に残っているのは、一人のおばあちゃんが小さなポット一つを持って、これに水を一杯でよいから入れて下さいと言われた時です。尋ねると、一人住まいやし、足と腰が痛いので、重いものは持てないとのこと。もっと他に大きい入れ物とは聞くと、あると言われたので家まで行き、給水をして家に運んであげました。帰る時におばあちゃんが私の方に何度も頭を下げ、

「消防の方。有り難う。有り難う。」

と言って両手を合わせていました。おばあちゃんの家は今でも覚えています。あの姿は私の目の奥

に焼き付いています。消防団員であって良かった  
と思い、あの時のことを想い出すと熱いものを感じ  
ます。

私は、戦争の体験はありませんが、この震災に  
より見知らぬ方々と語り合うことが出来て、自分  
で言うのも恥ずかしいのですが、一回り大きくな  
ったように思えます。私の父は戦死したため、顔も  
覚えていませんが、今は消防団員の一人として、  
いろんな意味で大きくもなり、少しは人間性が  
出来てきたように思えます。これからは、戦争と  
この大震災を体験した母を大切に、妻を愛し、  
この生まれ育った中野を愛し、日一日を大事に  
生きていくことに喜びを感じています。あの日  
を忘れることなくも遠い夢であって欲しいと思  
う。

## 大震災の体験

生瀬分団

分団長 浦 入 稔

突然、身体が宙に浮いたと思うと大きな横揺れ  
となり慌てて飛び起きる。電気が消えて暗がり  
の中、横に寝ていた妻は倒れた三段重ねの簀  
笥の下敷きとなり夢中で簀笥を持ち上げ引き  
ずりだし、階下で休んでいる祖母（84歳）の  
様子を見に行くとベットで何もわからず寝て  
いて安心する。辺りを見回すと真横には簀笥  
や人形ケース等が倒れたり落ちたりして、足  
の踏み場もない程散乱している。自分は消防  
団分団長、家の片付けは妻子に頼み、すぐに  
団員を非常招集し受持ち区域内の状況把握に  
出動する。ある団地では至る所でガス漏れが  
あり消防車で住民に対して、ガス漏れが発生  
しているので火気を使用しない様に広報させ  
る。区域内の1ヶ所で家が倒壊し4名が下敷  
きになっているとの連絡があり現場へ急行す  
る。現場に着くと2階建ての家は見るも無惨  
に押し潰されており警察、消防署員も到着し  
ておらず付近の住民の方々は、なす術もなく  
ただ騒いでいるだけだった。団員と共に救助  
活動を開始したが、どこから手をつけたらよ  
いのか、廃材置場の様な中で作業を進めてい  
くうちに母親の腰から下が見

え、反対側では子供の足首が見えてきた。大  
声で呼ぶと母親は元気に返事をしてくれ、子  
供の方は足を動かして答えてくれた。救出作  
業を進めていくとどうしても土埃がして母親  
が息苦しいと訴えるので、私は咄嗟に作業  
を見守っている近所の人にタオルを水で濡ら  
して来てくれる様に頼み、それを母親に渡  
し口と鼻に当てている様に言い作業を続け  
た。開始から2時間余りで無事母親を救出  
し、子供の方は髪の毛が崩れた梁の下敷き  
になっており髪を切って救出した。到着した  
救急車で母子2名を病院へ搬送した。残りの  
子供2名はそれから30分後に救出したが、  
既に冷たくなっていた。又、この救出活動  
中に新たに1ヶ所裏山のコンクリート擁壁  
（高さ5m、幅1m、長さ9m）が崩壊し  
ているとの連絡が入り団員半数を現場へ  
と急行させ救出に当たらせ、私は4名の救  
出が終わり現場へ行くと消防署員と合同で  
必至の救出活動中であつた。現場を見ると、  
とても座敷からの救出は無理と判断し床下  
からの救出に変更するよう指示をし作業を  
進め、ようやく昼過ぎに救出するも既に息  
絶えていた。消防団本部より応援に来るよ  
う要請があり、分団役員の奥様方の炊き出  
しで食事をとり団員3名を連絡要員に置き  
残り団員33名を消防車2台と自家用車に分  
乗し消防本部へと走る。本庁に近づくにつ  
れ地震の規模の大きさに改めて驚く。本部  
に着くと生瀬分団は香榎園地区の救出に行  
くよう指示され現場へ行く途中、住民の方  
が私達の車を止めて、

「この家（倒壊家屋）に、まだ1名いるので  
助けてくれ！」

と懇願され、それを振り切ってまで行くこ  
とはできず、まずそこで作業して次へ進む  
といった具合で仲々目的地にたどりつく事  
ができなかった。指示された場所に着くと  
道路を挟んで反対側の家が6軒並んで倒  
壊しており、まだ中に逃げ遅れている人  
が居るという事で、機動隊員4名と合流  
して救出活動を行った。現場は2階建て  
の集合住宅で1階部分が押し潰されてお  
り、まず2階の畳を取り除き床板や梁、1  
階の天井板を取り、倒れている簀笥を裏  
から壊し中の衣類を引張り出した。簀笥  
の引出しを取り払うと手が見え、その下  
から簀笥を支えるような形で遺体が見つ  
かり担架もない

ので畳に乗せて運び出した。この現場では3名の尊い命を救出する事ができた。この後は、他所で作業をしている団員と合流し、ここでも4名を救出したが、3名の方は亡くなられていた。最後に救出した84歳の老女の方は、生存が確認されての救出活動だったので活気がみなぎっていた。それ以上に救出活動を見守っておられた家族の皆さんの喜び様は言い表せないものがあり、改めて命の尊さを知らされる。慎重に作業を進め無事救出し、救急車がないので消防車にて県立西宮病院へ搬送した後、消防局へ引上げたとき時計の針は午後11時を指していた。遅い夕食は、おにぎり1人1個であったが分団員一人として不平不満を言わずによく頑張ってくれた。その直後、団長より生瀬分団の1車輛は津門分団と共に津門協立病院に急行し、三田市よりの救援給水車の水を屋上タンクまでポンプアップする様指示を受ける。直ちに協立病院に急行する。断水のため屋上タンクの水は既に消費し給水車の水では圧力なき為、手術等が出来ないのでポンプ車を要請したとの事である。津門分団と協力積載している「トーハツ」小型ポンプを有効に利用して屋上タンクに送水することに成功した。足の踏み場もない位の負傷者を何とか早く充分な治療が出来る様にせねばと気が焦るばかりであった。任務を終え分団車庫にたどりついたのが真夜中の2時でした。一度に色々な体験をした本当に長い夕々日でした。翌18、19日は、朝8時より市の防災中心部へ応援、土埃や瓦礫の中での救助活動でしたが、分団員誰一人として不満を漏らさずに黙々と活動してくれたのには敬意を表します。20日からは消防自動車に1tの水タンクを積み給水活動、主に市が設けている給水場所より遠く離れている所への給水で特に、老人世帯の人達には大変喜んでいただいた。2月20日まで実施、この時ほど普段何げなく使っていた水の有難さが身に染みてよくわかりました。

今度の反省として

■ 消防車1台に「担架」1基

■ 原動機の「チェーンソー」1台 を設備出来ないものかと思えます。

## 1月17日その日その時

甲子園口分団

副分団長 難波洋三

その日、ダンプカー、ブルドーザーが走るような地鳴りの音で目を覚ました。横で寝ている妻に、

「おい！地震や！」

とたたき起こし、布団の上に座ると同時に、

「ドンドンドン」

と激しい縦揺れ、身体を起こしかけている妻が飛んできた。(バツシャー) 停電、暗闇の中に、閃光が3、4筋走る。どこかで電気がショートしたようだ。腰にしがみつく妻の頭を左手で抱え、右手は自分の頭を抱え、隣で寝ている息子(20歳)に、

「和樹、布団をかぶれ」

と声をかけるが、建物のきしむ音、家具の倒れる音、マンションのあちらこちらから女性の悲鳴…。横揺れに身体が左に右に振り回される。

「何でこうなるんや！」

「負けてたまるか！」

「くそったれー！」

と大声を上げる。目の前に窓があり、いつの間にか2人とも向きが違っていた。

「和樹、大丈夫か、怪我ないか。」

「どうもない。」

と返事が返ってきた。

「ガスの元栓閉めろ！玄関あけろ！」

と言いながら、パジャマの上からズボンをはいた。いつもの夜中の火災出動と同じ動きである。時計を見て、窓の外を見ると、火力発電所の煙突、阪神高速湾岸線、天保山大橋のイルミネーションだけが瞬いている。何という不気味な静けさだろう。立花方面で火災か分からないが煙が見える。風はないようだ。箆箆を乗り越え、懐中電灯を探すが、いつものところがない。諦めて立ち上がると、足に懐中電灯があたった。玄関の方から和樹が、「西宮北口の方で火事や！煙が3本見える。」と言った。リビングの床が濡れている。数日後に分かったが、風呂の残り湯が激しい揺れで溢れたらしい。下駄箱を起こし、長靴、ヘルメットを探

しだし、やっと外に出られた。隣から、

「助けて！出られない。ドアが開かない。」と声がし、1、2の3で中からと外から押して引いてようやく開き、みんな無事に出てきた。600号室からドアをたたき音、又、

「1、2の3」

で引っ張って開いた。あと1時間ぐらいすると夜が明けるから、それまで廊下にいる方がよいと言い残して6、7階の全室のドアをたたいて回る。

「助けてー！」

「中におばあちゃんがいて出られない。」内開きのドアで簞笥、本棚の下敷きになっているとのこと。幸い、ドアと天井の間にガラス窓がある。ガラスを割って中に入ることが出来た。既に、男手も大勢いたので、後は任せて分団車庫へと走った。30分ぐらい経過したかと思う。途中、外に出ている団員に

「行くぞ！」

と声をかけ、又、団員の両親の住んでいる家に立ち寄り、無事な顔、声を聞き安心する。消防車の赤色灯が見える。走る。走る。現在、分団長以下4名出動。他の団員の安否が心配。

西宮北口、夙川方面で5、6箇所火災が見えると報告。市内全域で倒壊家屋があると分団長から聞く。当分団地区内は甲子園口分団だけで対処しなければならないと覚悟する。倒壊家屋からの救出。1人、2人、1軒、2軒と廻っていく。知り合いの人から、難波さんこっちに来て、

「〇〇さんが2人まだ出てこない。」

と言われ、そちらへ向かう途中別の人から死にそうな人がいると手を引っ張られていく。路上に布団が2つ。1人は男性。

「ワシは大丈夫やからそっちをみてくれ。」もう1人は女性で顔色は悪い。呼んでも返事がない。すぐに応急手当をしなければならない。なにぶんにも経験不足。やらざるを得ない。聴診器を持った人が声を掛けながら走ってきてくれた。近くの耳鼻科の先生だ。よかった。心強い。消防団の研修でやった救急講習会を思い出しながら、気道確保、先生が心臓マッサージをする。1、2、3、息をフーツと吹き込む。胸が膨らむ。1、2、3、フーツ、1、2、3、フーツ。胃液が上がっ

てくる。思わずむせる。1、2、3、フーツ、何回したろうか。その時先生が、

「駄目だ。もういい。しなくてよい……」残念でならなかった。

消防自動車で団員数名と甲子園口3丁目方面へ向かう。3丁目の現場は、梁の下敷きになった女性1名、家族の人が小さな鋸で梁を切っていた。隣の3階建ての屋上より、ロープで梁を引き上げる方法をとる。屋上に上がった人から、

「駅の北側で火事みたい。」

と教えてもらう。すぐに団員に消防自動車を回すように指示する。やがて救出し、家族の人が病院へ搬送した。直ちに火災現場へ向かう。JR甲子園口駅前のホーキビルが倒壊している。そのビル北側の店舗2軒が火災現場。既に防火水槽に部署し、3線放水していた。団員10数名出動している。防火水槽の水もなくなりつつある。スコップを持って近くの新堀川へ向かう。普段川底は15センチ位なのに、50センチにも水位が上がっていた。あとで分かったが、下流で川底が1メートルも上がり、自然のダムが出来ていた。ホーキビルは倒壊というよりも、爆弾が爆発したようで原形をとどめていない。倒壊した建物は、駅前ロータリーを乗り越え、向かい側の歩道にまで達していた。どこかに進入口がないかと見て回るが、丸腰の我々ではとうてい無理である。電話が不通のため、現況報告を自転車で瓦木消防署へ向かう。

「午前9時過ぎ現在、甲子園口地区、火災1件、倒壊家屋多数、甲子園口北町で7階建て雑居ビルホーキビル倒壊、入居20世帯、入居人数不明、30名ぐらい中にいると思われます。」と報告。

午後2時過ぎ、大型レッカー車が到着。その後すぐに自衛隊、警視庁レスキュー隊到着。火災現場のガスが止まらず、午後10時まで放水する。自衛隊と共に、ホーキビルの救出作業を午前2時まで行う。明朝7時より救助活動再開。その後1週間救出作業が続いた。

生存者 1名

死者 17名

## 救助にあたって

下大市分団

団員 岡 島 豊

1月17日、家族の無事を確認した私は、分団の詰所へと向かいました。すでに数名の分団員が集まっていますが、地震の直後で、情報も少なく今まで考えもしなかった大惨事に正直戸惑っていました。集まった団員の間では、自宅の被害状況及び自宅周辺の被害状況の情報交換が行われ、被害の増大が予想されたため、招集がかけられることになりましたが、停電のため通常のサイレンが使えず、消防車のサイレンが代用されました。

時を同じくして、近隣住民の方から家屋が倒壊し、住人が下敷きになっているとの通報があり、私たちは現場へと向かいました。薄暗い中、懐中電灯を片手に現場へ到着すると、家屋は、完全に崩壊し、2名が下敷きになっているとの事でした。家族の方は、懸命に下敷きになっている家族に声をかけて励ましていました。はっきりとした声で、

「助けてくれ！」

という返事もあり、救出作業が始まりました。瓦礫の山を一つ一つ手作業で取り除く以外に方法はなく、家族の方と共に、3～4名で作業は行われ、時折声をかけ勇気づけながらの作業が続きました。辺りが明るくなってきた頃、近隣の方も作業に加わり、10名を超える人手になっていました。その介もあり、間もなく2人とも救出することができました。救出後、病院に搬送した時、この地震での被害が甚大であることを痛感し、恐怖を覚えました。病院内はパニック状態で、処置室に入りきれない怪我をした方達が至るところで治療を受け、寝かされていました。この光景は、今でもはっきりと脳裏に焼き付き、おそらく一生忘れることはないと思います。続いて私は、救出作業が行われている次の現場に向かいました。現場では、同じく2名の方が下敷きになっていました。先の現場とは違い、家屋の2階部分がそのまま1階に乗っているため、身体が挟まった状態になっていた。中心になって作業を進めている分団員が、ジャッキが必要だという。しかし、ジャッキ

は車載の短いジャッキしかなく、試行錯誤を繰り返しながら、何とか身体が引き出せるだけの隙間が確保でき、無事に救出することができました。他の分団員の現場では、亡くなられた方がでいるという情報も入りました。また、住民の方からは、新たな現場の通報が次々に入ってきました。通報者も興奮しているため、言葉も荒くなりがちで、分団員とのやりとりが続く。限られた人数で、道具もなく、技術も知識も少ない我々は、一箇所ずつこなし、生存が確認されている現場を優先し、救出していく以外なすべがなかった。次の現場では、完全に身体が挟まった状態になっている。ほとんど意識がないようで緊急を要した。しかし、この現場では、車載ジャッキだけでは間に合わず、ジャッキの確保に走り、トラックの所有者からジャッキを借りてようやく救出することができた。意識がない状態のため、少しでも早く搬送しなければならないが、道路は車でごった返しているため、サイレンを鳴らし走るが渋滞して動かない。私は、焦りと腹立たしさが入り乱れていました。病院には、自家用車で搬送してくる人も多く、かなりの人がこの渋滞に歯痒い思いをしていたと思う。その後休む間もなく、救出、搬送そして次の現場に向かうという活動が繰り返されていました。この日の救出活動は、懐中電灯の灯りをたよりに午後8時過ぎまで続けられました。この日の最後の救出者は、70歳を超える一人暮らしの老人でした。家屋は、完全に崩壊し、どこにいるのか全く見当もつかない状態で、瓦礫の取り除き作業を行っている、僅かなうめき声が聞こえてきた。少数で作業していたのが幸いしたのか、現場にいた全員の耳に入った。生存を確信した私たちは、少しでも早く助けなければと、応援を呼びに行き、懐中電灯の灯りの中、救出することができました。この日一日の救出者は11名で、うち遺体での救出は3名でした。救出活動を終え分団詰所に帰り、ようやく我に返ったような気がしました。まだ、気が張っているせいか、疲労感や空腹感は余り感じませんでした。この日一日の出来事が、頭の中を駆けめぐりましたが、現実として受け止めたくなかった。悪夢であってほしいとも思いました。しかし、現実は今からの



余震にも備えねばならず、夜通しの警戒が続きました。

1月18日、昨日の反省からチェーンソーやジャッキなど必要な作業用具が確保され、救出作業に臨みました。受け持ち区域で、昨日手の付けられなかった現場で、自衛隊の救出活動を見守りながら遺体の出されるのを待ちました。そして、遺体の搬送、病院には汚れた毛布で覆われた遺体が、床に何体も寝かされていました。病院内は、昨日のパニック状態が信じられないほど落ち着き払っている様に私の目には映り、なぜかほっとした気分になりました。幸い受け持ち区域では、火災の発生が1件もなく、救出活動も順調に終わったため、隣接する分団の応援に向かいました。まだ家屋の下敷きになっている現場がかなりあるとのこと、他の分団からも応援がきて救出作業が行われていましたが、どの現場も生存者はなく、遺体で出されていました。

翌日は、消防署との合同作業となり、かなり複雑な崩れ方をした家屋での作業となりましたが、懸命に作業を続け、ようやく遺体を出しました。この日を以て分団による救出作業は終わりました。

私は、自宅の倒壊が免れていたため、最初に倒壊現場に行ったとき、正直行って恐ろしかった。また、私たちは、今回運良く救出する側にまわっただけであり、今後は今回の教訓を生かした万全なる備えをしなければならないと思いました。救出作業を迅速に行うための作業工具の充実もその一つだと思います。今回工具の確保に手間取り、救出作業に支障を来した例が度々あったと思います。救出した後、数名の方が亡くなられたと聞きました。もう少し早く救出できていれば、助かっていたかも知れないと思うと悔しくてなりません。

最後に、残念ながら遺体での救出となった方々、また、この阪神大震災でお亡くなりになった多くの方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 阪神大震災に思う

小曾根分団

団員 宮田 良 浩

まず冒頭に、この度の震災により不幸にも犠牲となってお亡くなりになりました方々には心よりご冥福をお祈り申し上げます。そして、被災されました方々に心よりお見舞いを申し上げます。誰もが予想もし得なかった突然の惨事が、これほどにも大きな被害に発展してしまった事は、単に地震の大きさだけではなく、様々な状況が重なり合った事実があると思います。消防団員として、地震の当日から今日まで、いくつか感じてきたことを少し述べてみたいと思います。

まず最初に、今回の地震で恐らく大半の方が感じられたのではないかと思います。全てのライフラインがストップしてしまった時、何よりも急を要したのは何と言っても「水」だったのではないのでしょうか。電気は懐中電灯などで多少の代用はききます。が、水だけはそれでは足りないものです。事実、地震直後、スーパーやコンビニなどから食料と共に飲料水が不足し、かなりあちらこちらと苦労して確保されたのではないかと思います。ですが、水道が止まってしまったことで苦労したのは、飲み水だけではなく、ご存知の通り、その直後から西宮市内でもかなりの火災が発生していました。出動要請があり、現場へ駆けつけたときには既にかかり炎上しており、直ぐ消火活動を開始するにも消火栓が断水で使いものになりません。先に到着していた分団と相談して、とりあえず近くのマンションの貯水槽を使って放水したのですが、水量に限りがあるため、鎮火するまでには至りません。漏れたガス管に引火し、時々「ボン」と音をたてて小さな爆発が起きます。いつ大きな爆発が起きるとも判らず、またいつその建物が炎と共に倒壊するかも判らない状態の中で無念にも放水の圧力が下がってきます。

「水利さえあれば消せるのに……」

これが一番最初に感じたことでした。普段消防団ではそれぞれの担当区域が決まっており、その区域内の水利については、消火栓を始め河川や学校

のプールなどの場所を把握しているのですが、今回のような緊急時にはそれ以外の区域へも出動することがあり、その場その場で水利を確保しなければならないのです。それぞれがお互いのためにも、今一度身近の水利を確認し、例えば消火栓の上への違法駐車や河川の水量の確保など、町ぐるみでの取り組みも必要なのではないかと思うのです。もちろん、今後の復興にあたって、地下の防火用貯水槽など行政による整備も望まれるところですが。

次に感じたこととして、道路の渋滞がありました。当日、既に早い時間帯にどの道も車で溢れかえっていました。勿論、怪我人や急病人を病院へ搬送していた車もあったでしょう。電話も通じず、身内や親類の安否を確認するため、現地へ向かっていた車もあったでしょう。しかし、あんな状態の中で、あまりにも皆が車を使いすぎたとは言えないでしょうか。救急車や消防車など緊急車両がもっと早く現場に到着できていれば、命が救われた方がどれほどいたことでしょうか。重傷にならず軽傷で済んだ方も沢山居られたかも知れません。あの日、市内の消防団は全て西宮消防本部に集結し、次々と入る119番通報で出動していったのですが、当然救急車があちらこちらへ出払っていったので、当分団の車両も瓦礫の下になった方々の救出にかなりの件数出ていきましたが、現場へ向かうどの道もこの道もまるで駐車場のごとく渋滞していて、まるで身動きがとれませんでした。実際119番に通報しているのに、いつまで経っても来てくれないとイライラされた方は少なくないと思いますが、いくらサイレンを鳴らしてもマイクで叫んでも、バイクでさえ通れないようななか、はっきり言ってかなり苦労しました。到着してみたら、倒壊した建物の隙間から足の先だけが見えています。声を掛けても返事がなく、その足は既に冷たくなっているのです。家族の人の悲痛な叫びに何と言って説明すればいいのか言葉を失います。もしかしたら、つい今まで生きていらっしやっただかも知れないと思うと、何とも言えない無念を感じました。そこにいると判っていながら、救い出せなかった無力さと苛立ちが交差する悔しい気持ちは、今思い出しても残念でなりませ

ん。ご近所の方々のご協力で

「この人は助け出しましたよ」

と言っていた現場では、ホッとする一瞬ですが、あるところでは

「今頃のこのこやって来ても、助かる訳ないでしょ！」

と言われたときは

「すぐに来たくても、道が混んでしまって来れないんだ！」

と心の中では悔しさを覚えつつも、かなりショックでした。さすがに地震の翌日からは、規制されていて緊急車優先になりましたが、この現実もそれぞれが「我先に」の気持ちを持たず、緊急時におけるモラルを再確認しなければならないのではないのでしょうか。ちなみに、午後11時頃に神戸へ向かうために来てくださった三重県下の消防車がやっと西宮を通過されたような始末だったので

3番目には、通信手段でありました。停電のためにテレビによる情報収集が出来ず、電話もほとんど使いものにならないので、携帯ラジオだけが唯一情報を入手する手段でした。私は、趣味でアマチュア無線をしていますので、地震直後にハンディトランシーバーで友人に無事を知らせることが出来ました。又逆に、皆の安否を確認することもできました。その後に消防無線を傍受してみましたが、どれもこれも混乱しきっている様子がありありと感じられました。消防団の使用している消防車にも無線機が設置されていますが、受信するのみで電波を送信することは許されていませんので、本部からの指令は確認できても、それに対して返事をする事が出来ないのです。こちらからの確認や連絡は、電話を使わなければならなかった訳ですが、これがまたなかなか通じないために手間取りました。これはあくまでも私の個人的な見解に過ぎませんが、今後のためにも非常時の通信手段の充実を期待したいと思います。

さて、話は多少前後しますが、時間が経つにつれ消防団の活動は、給水活動に変わって行きました。消防車の後ろに給水タンクを載せ、それぞれの区域の給水を行いました。ここでもどれほど皆が「水」に困って居られたか改めて痛感する

日々でした。初めのうちは、こちらも要領がつかめず、どこへどのように回ればいいのか暗中模索でしたが、事前にマイクで広報しておいて、そこへ集まっていただく方法をとりました。最初は、広報しても車が消防車だけに、不思議そうに家の窓から覗いて居られましたが、何人かが来られるのを見て、慌てて走って来られる様子でした。出来るだけ毎日同じ時間に同じ場所へ行こうとスケジュールをたてましたが、鳴尾浜へ来てくださる給水船の時間によって多少のズレがあり、首を長くしてお待ちいただいていた方々が沢山居られたことと思います。特に、団地やマンションなど高層の建物の多い地区では、みるみる行列が出来るために一回の給水ではとても間に合わず、途中で汲みに戻るあの寒空の中にじっとお待ちいただいたこともしばしばありました。ですが、同じ時その寒空の中で船から1台1台に水を入れてくださった給水船の作業員の方々がおられたことを、改めてお伝えしておきたいのです。全国各地から何時間もかけて駆けつけ、休む間もなく給水していただいた有志の方々の善意がこもった「美味しい水」だったはず。この場をお借りして改めて感謝申し上げたいと思います。

これから復興に当たっては、容易に解決できないことが多いでしょうが、この教訓を無駄にすることなく、今後は「全国のモデル都市西宮」にならなければなりません。それが生き残った我々がなすべき義務だと言っても過言ではないと思います。皆の協力ですばらしい西宮を再建していきましょう。

最後になりましたが、救援いただきました全国の沢山の皆様に心より厚くお礼を申し上げます。ご支援本当に有り難うございました。